

贈呈理由

(財)庭野平和財団(庭野日鑛総裁、長沼基之理事長)は、「第19回庭野平和賞」をメキシコ・チアパス州で40年にわたりカトリックの司教を勤められてきたサミュエル・ルイス・ガルシア師(77歳、対ラテンアメリカキリスト教国際連帯機関オスカル・A・ロメロ会長、バルトロメ・デ・ラス・カサス人権センター会長、中米・平和活動諮問機関会長)に贈呈することを決定致しました。世界125カ国、約1000人の識者に推薦を依頼し、仏教、キリスト教、イスラム教など7人で構成される審査委員会で厳正な審査を行い、決定したものであります。

ルイス師は、メキシコおよび中南米地域での人権擁護活動に関わり、特に社会的、政治的、経済的な抑圧を受け続けてきたメキシコ先住民(インディオ)の地位向上、文化復興に身を賭して取り組んでこられました。信仰に裏付けられた公正で真摯な人柄と諸活動は、人々から深い信頼を得、敬愛を込めて「貧しい人々のための司教」とも呼ばれています。政治や経済の価値観を最優先するのではなく、人間の普遍的倫理観を貫き通そうとする歩みは、中南米のみならず世界的にも多大な影響を与えています。

1924年、ルイス師は、メキシコ・グアナクワト州のイラクワトで5人兄弟姉妹の長男として生まれました。小学校から神学校に進み、1947年にはイタリア・ローマの教皇庁立グレゴリアン大学に留学されました。1959年、若干35歳でメキシコ・チアパス州のサンクリストバル・デ・ラス・カサス教区の司教に任命されたルイス師は、着任直後から教区内をくまなく巡回し、先住民の人々の置かれた理不尽な状況を肌身で感じ取られたといいます。

チアパス州に住む先住民の人々は、コロンブスによる大陸征服、スペイン支配時代から、500年余にわたって貧困、抑圧、差別に苦しんできました。政府や一部の権力者が、先住民の土地を収奪したことは、よく知られるところであります。人々は、安い労働力として働かされ、「カシケ」と呼ばれる地方権力者が、数千、数万の人々を支配し、富を独占するという状態が続いていました。大土地所有者、大企業と地方政府、国家との癒着も半ば公然と行われていました。特にチアパス州の先住民の置かれた状況は極端に劣悪でした。労働人口の約60%が最低賃金(月120ドル)を下回り、幼児の栄養失調による死亡率も国内で最高となっていました。先住民の人々は、歩道を歩けず、一段低くなった車道を歩かなければならないという人種差別も行われていました。差別と搾取の動かしがたい社会構造が出来上がっていたのであります。

あまりにも大きな社会的矛盾に心を痛める中、1962年、カトリック教会で「第二バチカン公会議」が召集され、ルイス師も司教の一人として参加しました。この公会議が、ルイス師に信仰者としての大きな転機をもたらすこととなります。それは神の福音とは、与えられたメッセージを画一的に伝えるのではなく、現実の歴史の中で、文化の中、地域の中で、福音の意味を解明し、具体化していくということでした。以前の中南米地域に対

する福音伝道は、西洋文化の移入も伴っていたため、先住民独自の文化を抑圧する一つの要因であったことも事実でした。こうした反省をもとに、ルイス師は、新たな形での聖職者養成、伝道師養成に取り組みました。伝道師は、その土地の言語と文化を学ぶことから伝道を始めます。そして、その過程を通して、現実の歴史、文化、地域に根付いた新しい伝道のビジョンが、徐々に形づくられていきました。

その後も、ルイス師の教区では、さまざまな改革がなされました。しかし、もっとも重要なのは、1974年に開催された「先住民会議」だと言われます。ルイス師は、この会議を学術的なものにする事なく、先住民グループを招待して、課題を共有し、相互協力を図っていく場としました。先住民グループは、「先住民会議」への参画を通し、生き残りのために必要な4つの要素を挙げました。それは、教育、生産物の市場調査、土地の分配、保健衛生でした。この現実的な要請を前に、ルイス師は、司教区の伝道計画が、まだ現実からかけ離れていることを実感しました。福音は、決して超越的な理想であってはならず、現実生活の問題に答を与えるものでなくてはならない、と改めて確信したのです。

「先住民会議」の直後から、ルイス師は、貧困に苦しんでいる人々のための社会活動プログラムを積極的に展開しました。その中で、ルイス師は、先住民の人々が、「自分たちの歴史の主体」になっていく重要性を訴え続けました。自らの歴史、運命を他の人に決定されるのではなく、自分たちが歴史の主体となって新しい世界を創造していく。自身の民族的、文化的ルーツに回帰し、自身のアイデンティティーを回復していく——その願いは、一步一步、しかし確実に、人々の中に根付いていきました。

1994年1月、チアパス州で活動を続けるサパティスタ民族解放軍（EZLN）が北米自由貿易協定（NAFTA）の発効と合わせ、武装蜂起しました。貿易の自由競争が激化すれば、米国の安い産物が輸入され、先住民の人々の主生産物であるコーヒー、トウモロコシは大打撃を受け、貧困をさらに悪化させる恐れがありました。先住民の生活の救済と権利回復——それらがEZLNの主な主張でした。武装蜂起から11日後、国内外の世論に押される形で、メキシコ政府は停戦を申し入れました。EZLNも受け入れました。この際、調停役に選ばれたのが、ルイス師でした。その後、ルイス師は、調停活動を強化するために組織された仲介のための全国委員会の代表も務められています。

この調停活動についてEZLNの中心的存在として知られるマルコス副司令官は、次のように述べています。「和平の道を妨げる全障害物を排除しようとする仲介のための全国委員会代表・サミュエル・ルイス・ガルシア司教の気遣いは、偽りのない永続的なものである。（中略）この大地にいくばくかの平穏が取り戻されるなら、彼らの和平を達成しようとする活動のおかげに違いない。仲介のための全国委員会に参集するグループの犠牲精神に満ちた献身活動に対して、特にサミュエル・ルイス・ガルシア司教に対して、われわれは敬意を表する」と。ルイス師は、のちに政府によって監禁され、また与党の息のかかったグループから暗殺を企てられながらも、誠実な調停活動を続け、国内のみならず世界的に大きな尊敬と高い評価を得ました。まさに正義と尊厳を伴った平和の象徴と申せましょ

う。

『自分の道だけを探している限り道は見つからない。しかし他の人の道も同じく探すと道は見つかるであろう』——ルイス師は、この聖書の一節を引用し、他者を愛すること、辛抱強く、注意深く歴史の進展を見守ること、他者を理解しようと努力することは、共同体をつくる上で重要な要素であると同時に、むしろ共同体の中から学ぶことができることである、と述べられています。

紛争調停や平和構築に取り組んでいるさまざまな教会間の国際協力について、ルイス師は、「それはさまざまな和解や調停活動についてまとめを作ることだけが目的ではありません。そこでは、和解と平和構築のプロセスについて真摯かつ客観的に検討することが重要です。つまり、お互いの失敗の経験を分かち合うことにより、同様な失敗を繰り返さない様にするのが大切です。」と述べています。ルイス師はこのようにエキュメニカル運動のキーパーソンというだけでなく、平和構築に向けた国際的諸宗教対話と協力活動においても重要な役割を果たしているのです。

すべての生命は等しく尊い、と多くの宗教は教えます。しかし、現在の世界は、その根本が見失われつつあります。その意味からも、庭野平和財団は、ルイス師の普遍的倫理観に貫かれた平和への献身に深く敬意を表し、またこれまでの多大な功績を顕彰すると共に、さらに多くの同志が輩出されることを念願して、ここに「第19回庭野平和賞」をお贈りするものであります。